

わが街熊谷遺跡めぐり 元境内遺跡

1 はじめに

元境内遺跡は、熊谷市南部野原地内の江南台地上に所在し、南側には和田川が流れる標高 50m前後の南に傾斜する緩斜面に所在する遺跡です。

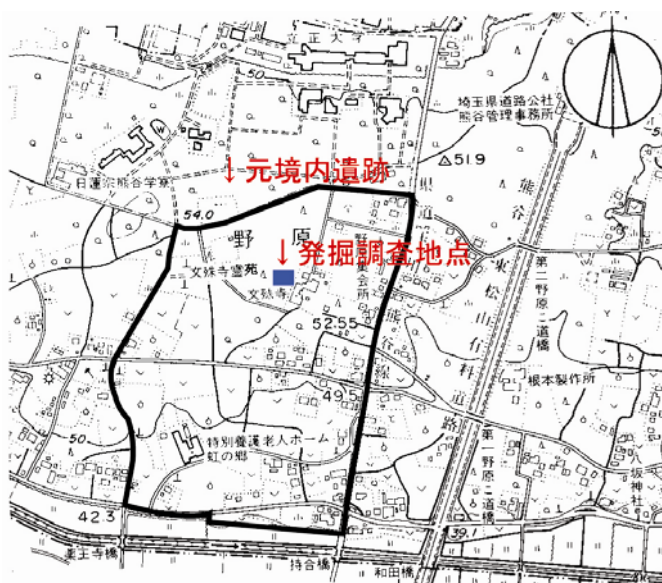
現在の文殊寺は、『新編武蔵風土記稿』によれば、1483 年に増田四郎重富が、自分の居住していた館に七堂伽藍を建立し、境内地 1 万 5 千坪を寄進した事により始まったとされ、開基より 35 世を数えています。

当時の館跡の痕跡として、境内の西・北側に外郭の土塁と堀が、西側で 230 m、北側で 320mが残っており、内郭の堀も西側で 110m程確認することができます。

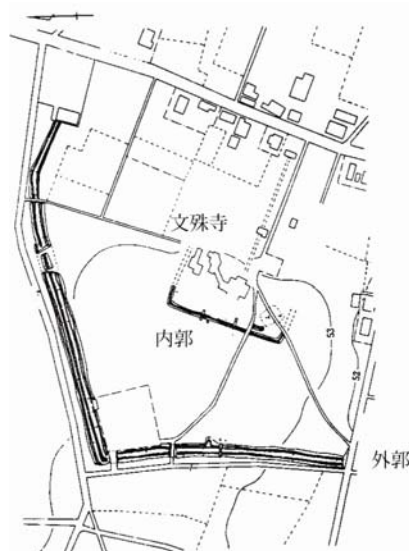
2 元境内遺跡の調査

1996 年には、当時の江南町教育委員会により本堂裏の 1,500 m²の発掘調査が行われており、中世の館跡に関連する遺物から、近世の文殊寺に関する遺物、そして昭和初期の電球・ビン・陶磁器類が多量に出土しています。

文殊寺の伝承によると、文政 11 年（1828）に火災が発生し、本堂その他



第 1 図 元境内遺跡位置図



第 2 図 元境内遺跡土塁位置図

12棟を焼失したとされています。

1996年の調査では、天明3年（1783）に噴火した浅間山の火山灰層の上より、火災によるものと推測される焼土層および、廃棄された多量の炭化材・瓦・鉄釘・仏具・陶磁器類が出土しており、この火災を裏付けるものとなっています。

写真1 第1号溝遺物出土状況



3 「京焼写し」について

出土遺物の中で、肥前産陶器の「京焼写し」と呼ばれる陶器は、県内でも他に類を見ない程充実しています。

肥前産陶磁器と呼ばれているものは、大きく「陶器」と「磁器」に分けられています。従来、陶器は「唐津焼」、磁器は「伊万里焼」と呼ばれ、それぞれ積み出し港にちなんで、消費地で付けられた名称と推測されています。

「唐津焼」は、1580年代頃に朝鮮半島から移住した陶工により始められたとされており、「伊万里焼」はやや遅れて17世紀に入り、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に、鍋島軍により連れてこられた朝鮮半島の陶工が磁器の焼成に成功した事に始まるとされています。そして17世紀後半に至り、著しい技術革新を遂げ、それまで中国からの輸入に頼っていた磁器に代わって国内市場を席卷し、オランダ東インド会社を通じ、西欧にも輸出されるまでに発展しました。

この時期、伊万里の磁器の窯で焼かれた特徴的な陶器があります。素地は緻密で、卵黄色気味の釉が掛り、内面には呉須（藍色顔料）で楼閣山水文様が描かれています。高台下には「清水」「木下弥」「新」等の印が押されています。

これらの特徴は、それまでの肥前産陶磁器類の製作体系の中には見られない

異質なもので、「京焼」に類似することから、「京焼写し」と呼ばれています。

「京焼」は、現在でもその詳しい窯業形態は不明ですが、「仁清」「乾山」等の陶作品に代表される、素地が緻密で、卵黄色気味の釉が掛り、色絵を施した近世における最高級陶器でした。

つまり、当時すでに高級喫茶碗としての名声を博していた「京焼」というブランド名を念頭に置き、大量生産によるコピー商品の流通販売を伊万里の陶工およびその管理者が狙ったものと推測されます。

コピー商品と言えど、現在のところその出土例は決して多くなく、江戸の大名家敷クラスで数点～30点程、県内では元境内遺跡の他には僅かに数点が出土しているにすぎません。

元境内遺跡では、70点以上の「京焼写し」が出土しており、当時の文殊寺の「京焼写し」へのこだわりが伺えます。

4 「京焼写し」の用途

最も古い段階の「京焼写し」は、東京都の東大御殿下記念館地点から1660年代に属する資料が出土しています。この資料は、器形が「天目」様の形態となっています。「天目茶碗」は、中世より瀬戸美濃窯で焼かれ続けた抹茶を飲む器「喫茶碗」であり、この「京焼写し」初期段階の資料のみが天目茶碗の形態に類似するという事は、本製品が「喫茶」を意図して生産された碗であることを示唆していると考えられます。

では、文殊寺でなぜこの「喫茶碗」である「京焼写し」が多量に必要とされたのでしょうか。

文殊寺は、開山当初は天台宗に属していましたが、言い伝えでは、文明15年(1483)に曹洞宗(禅宗)に改宗しています。近世の主な禅宗寺院では、禅修行僧の集団生活における規範「清規」に定められた飲食儀礼の一部をなす喫茶作法「茶礼」が行われていました。

70個体を超える同一種の碗類の用途は、通常の日常雑記としての用途を想定することは難しく、「茶礼」における喫茶碗の用途を想定するのが最も適していると考えられます。

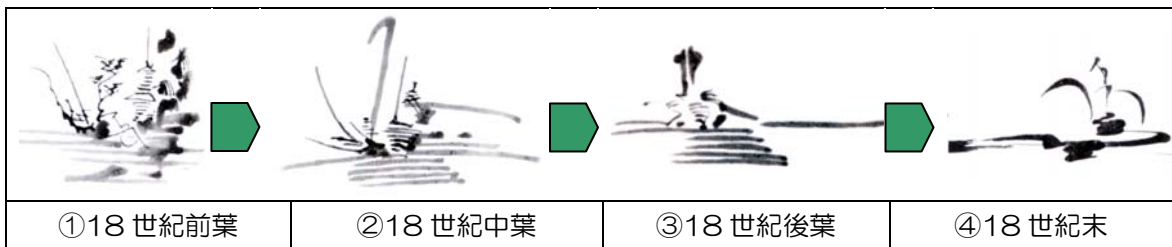
他の近世寺院の発掘調査例を探すと、東京都新宿区天龍寺跡遺跡、群馬県藤岡市上栗須寺前遺跡、福島県いわき市龍門寺遺跡でも「京焼写し」碗が出土しています。

5 「京焼写し」の変遷

「京焼写し」碗の内面に呉須で描かれた楼閣山水文は、「精」「具象」⇒「粗」「抽象」へ時間的方向性を持つことから、製作時期を知るためのメルクマールとして、17世紀後半から19世紀後半まで概ね6段階の変遷を識別することができます。

元境内遺跡では、第2段階から第5段階に属する資料が出土しています。当初細線（細筆）と太線（太線）の使い分けによって文様を描いていたものが、全ての文様を太筆のダミ的な筆使いのみによって描かれ、楼閣文が最後には椰子の木のように描かれています。

ある意味商品価値としては下がることを意味する文様の簡略化をおこなった背景には、単なる「手抜き」の方向性ではなく、需要の増大による大量生産に対応したものと推測されます。文様を抽象化してそれが何を表現しているのか消費者が理解できなければ商品は流通しないはずであり、逆に言えば、抽象化した楼閣山水文が流通しているということは、その文様が何を表現しているのか理解されるほど「京焼写し」が消費者に受け入れられていたと判断することができます。



第3図 「京焼写し」文様変遷図

写真2 「京焼写し」碗



平成24年12月6日発行

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）

— わが街熊谷遺跡めぐり — 元境内遺跡 テーマ展解説書第14集